

現代短歌分類辭典

第一卷

津端修編纂

津 端 修 編 集

現代短歌分類辞典

第 一 卷

イ ソ ラ ベ ラ 社

現代短歌分類辞典

1

昭和二十九年三月十日初版発行
昭和四十二年四月十日再版発行

定価四四〇円

著者兼
発行印刷者 津 端 修

東京都中野区上高田二丁目九ノ一六

発行所 イソラベラ社

電話三八七局八四二九番

振替 東京 六七三四一番

自序

一、この辞典は明治、大正、昭和三代の短歌三十万首を単語による品詞別としたもので、作者別による歌集を縦の分類とすれば、これは歌集を解体しての横をつらね 分類であり、その集大成されたものである。

二、単語の解釈は、意味の上からと、文法の上からと、内外両面からわかりやすく、要領よく解説しようとしたもので、云わば歌語に現われた単語の国語辞典であり、文法辞典であり、総索引である。

三、文法の理論の上から云つて当然有るべき筈の活用形が、実際の上からは見当らないことなどが、この辞典によつて 活用語を活用形ごとに列挙したことによつて明らかにされた。

四、用例を古典の勅撰和歌集、物語、日記の中に求めて豊富に挙げたこと、このことは古語が現代歌人に引継がれて、今日なお生きていることを如実に示したものである。

五、現代歌人によつて詠まれた新造語、それが誰によつて詠まれたかが明らかになり、その新造語の継承者の有無も亦明らかにされた。

六、三十万首の歌が同一単語を含んだ歌で、離合集散する多角鑑賞、多角研究の厳しさは

多くの相似作品の発見をたやすくさせている。相似作品の究明は、昭和今日の歌が源を遠く明治の初年に発して、幾多の脱皮を遂げたことを実証的に示すものであり、こうした観点からの短歌発展史が、何人かによつて書かれる示唆を讀者は受取るにちがいない。

七、古典に見られない文法の出現も明らかにされた。活用語の活用で使用された最初の頃にあつては、文法上の誤用と見られたものも、年代を経るに従つて使用者の増加はいつかそれを文法上の一角を切取らせて、確乎たる位置を占めさせるに至つたことである。それは氾濫した河川の低地に新しい流域を作つたと同じである。水は低きについて流れるように、時代人の好みも亦如何ともなしがたい勢をつくるものである。

八、この辞典のそもそもの出発点は、研究者に多くの資料を提供することにあり、所要資料獲得に消費する時間と労苦を最大限に節約し以て、研究者の能率を引上げることにあつた。従つて、歌に対する編者の好みといつちなものによつての項目ごとに挙げられた引用歌の増減ということはない。いつの場合にあつても、各項目下に列挙された歌数というものは、三十万首中にあつてのすべてであり、三十万分のいくつを正確に示したものである。

九、水は流れていなければいけない。とまると腐りはじめるからである。実作者にとつての危機、現在の歌境に安住することを絶えず刺戟するものとして、この辞典の豊富な

資料は、作歌意欲を昂める上に必ずやお役に立つことを信じたい。

十、歴史とは所詮は機会均等獲得に向つての苦闘といったものかも知れない。この辞典の狙いとするところも、亦、質を低下せず、より多くの読者と接したいことにある。同一単語を扱つての多種多様な表現の実例と単語の解釈は、歌の初心者にとつて闇夜の炬火たれとの編者 念願そのものにほかならない。読者層の幅を広くするための苦心の一端である。

十一、故人で主要な歌人の作品は、全作品を載録する方針をとつた。現役として今日活躍しておられる歌人の方々の作品は、昭和三十年迄の歌集を底本とした。

十二、三十万枚にわたるカードのこととて、その操作中に誤つて他に混入されたものが、後に発見されるかもしれない。そうしたものは補遺巻をつくるか、巻毎に増版の折に補遺とし巻尾に加える方法をとりたい。引用の歌集名を挙げるだけでも相当の頁数を割くので、これは辞典の最終に別巻として載録の用意をしている。

昭和四十二年三月

津 端 修

目次

愛さーるる	二	歌數	一九九	頁數	一
愛さーれーぬ	一		七		一八
愛さーれーむ	一		一四一		二〇
愛児	一		二		三二
愛しーたまへ	一		四		〃
愛しーたり	一		四七		三三
愛しーたる	一		一		三七
愛しーたるーのみ	一		一		〃
愛しーて	二		一		〃
愛しーぬ	一		四		三八
哀愁	二		一		〃
愛誦	一		一二		三九
哀傷	三		一		四〇
愛情	八		一		四一

愛情論
 愛しーをる
 愛す
 あいすくりーむ
 愛すーなり
 愛すーべき
 愛すーべけれーば
 愛する
 愛惜
 愛せーし
 愛せーしーならーむ
 愛せよ
 愛せーらるる
 愛せーられ
 愛せーられーつつ
 愛せーられーて
 愛せーり

歌数
 一 一 九 一 一 二 一 二 一 一 四 二 一 一 一 一 一 三 一 二 一 一 三

頁数
 四六 四七 〃 四八 〃 四九 〃 五〇 五一 〃 五二 〃 〃 五三 〃 五四 〃

愛染明王
 愛想
 哀訴
 愛憎
 哀草果
 愛著
 あいつ
 あいーて
 哀悼
 愛読
 あいぬ
 愛撫
 哀慕
 愛慾
 愛らしき
 愛らしく

歌数
 一 二 一 一 四 一 三 一 五 一 一 一 四 一 七 四 一

頁数
 五五 〃 〃 〃 〃 〃 五七 〃 〃 五八 〃 五九 〃 〃 六五 六六 〃 六七 六八

愛らしみ
愛恋
あいろ
アイロン
哀話
哀—を—挙ぐ
あうと
青母
足裏
あえ
あえかさ
あえかなり
あえかゝる
あえかに
あえ—し
あえ—たり
あえ—て

二三 一八 一二 一四 一一 一一 一〇 一一 一一 一二 二二 四四 一

七八 七七 七六 七四 七三 〃 〃 七二 七一 〃 〃 七〇 〃 〃 六九 〃 六八

あえ—ながら
あえ—に—け
あえ—に—
亜鉛
足音
赤
垢
銅
赤馬
関伽
赤赤
あかあかき
あかあかく
赤赤し
赤赤と
赤赤と—して
赤蜻蛉

二二 一五 三七三 八二 二一 二一 七三 一三 八二 二四 一四 八一

一三二 一三一 九九 〃 九八 九七 九五 〃 〃 九四 九二 八四 〃 八二 八一 〃 八〇

赤蟻
赤い
赤石山
赤石岳
赤いーぞ
赤いちご
赤糸
赤犬
赤岩
赤色
赤いんき
榕
赤う
紅う(中止法)
赤牛
明うーして

五	三	三	一六	一	二	七	八	四	一	一	一	一四	三	六三	五	歌数
一五〇	〃	一四八	一四七	〃	一四六	一四五	〃	一四四	〃	〃	一四三	〃	一四一	一三五	一三四	頁数

紅うばら
赤馬
赤漆
赤魚
赤絵
赤江灘
赤鉛筆
赤鬼
赤檉
赤がしら
赤かなめ
赤蟹
あかがね
あかがねいろ
あかがねかはら
あかがねくも

一	一	一四	一	一	一	一	五	三	一	一	三	一	一	一	一	歌数
〃	一五七	〃	一五五	〃	〃	一五四	〃	一五三	〃	〃	一五二	〃	〃	一五一	一五〇	頁数

あかがねーのーいろ
あか ねーのーぜに
赤川
赤草
赤瓦
赤貝
赤かぶら
赤蛙
緒顔
赤甕
あかかーらし
赤からーず
赤硝子
赤硝子戸
赤硝子窓
あかからーなくーに
明からーむ

一 三 一 二 四 二 一 二 一 二 一 一 三 一 一 一 二

〃 一六三 〃 〃 一六二 〃 一六一 〃 〃 一六〇 〃 〃 一五九 〃 〃 一五八 一五七

明からーむーとーす
あかかり
あかがり
あかかりーき
赤かりーけれーば
赤かりーし
赤かりーしーかな
明かりーしかーば
赤かりーしーかも
赤かりーしーに
赤かりーにーけり
あかかる
あかかるーは
あかかるーものを
赤看板
あかき
あかき (名詞形)

一 三 八 五 一 一 一 一 六 一 二 一 二 一 六 四 八 一 一 五 一

二八九 一七三 〃 〃 一七二 一七一 〃 〃 一七〇 〃 〃 六九 一六七 一六六 〃 〃 一六四

赤き—こ	赤き—心	赤き—黄色き	赤き—かも	赤き—かな—や	あかき—かな	赤き—が	明き—か	赤き—青き—も	赤き—青き	赤き—赤き	足掻	赤黄	あかき (名詞形、中止法)	あかき (名詞形、終止法)
一	九	二	五	一	一	一八	一	一	二	一	一三	一	一〇	二
三〇一	〃	二九九	〃	二九八	二九七	二九六	〃	〃	二九五	二九四	二九三	二九二	〃	二九一

赤城山	紅き—白き	紅き—と	あかき—に	あかき—は	赤き—ばかり	紅き—むらさき	赤き—も	赤ぎらふ	あかぎるる	垢切	あかき—を	あかき—をば	合計
五四	一	二	三〇	一五	一	一	三	一	一	九	三五	一	三、 一六二
三〇一	三〇五	三〇五	三〇六	三一〇	三一二	〃	〃	三一三	〃	〃	三一四	三一八	

あ 【名詞】「吾」「我」「朕」

自称の代名詞。吾の古称。「あれ」に同じ。「万葉集、二」——玉かづら花のみ咲きて成らざるは誰が恋ならめ吾は恋ひ念ふを（巨勢郎女）。「万葉集、二」——吾を待つと君がぬれけむあしひきの山の雫にならましもものを（石川郎女）。「万葉集、五」——家に行きていかにか吾がせむ枕づく妻やさぶしく思ほゆべしも（山上憶良）。

あゝ今日も一人の手紙今日に吾に何せよと責めて来るや

近藤芳美

赤赤と碁盤の角に日はさして五目並べは吾が負けにけり

北原白秋

あかあかと燃ゆる焚火に手をかざし安き心に吾がなりにけり

古泉千櫨

吾がいなば宵宮の裏のしづもりにいつまでとぼる灯なるらむ

木下利玄

あが人力車動きてあるを覚ゆれど眼の前の子をこそ守れ

島木彦

吾がために海に没りにし婦もへば顔を溢ながれて涙は熱し

宮柊

あが父のよざしのまにま頭剃り佛に頼りぬ避路は無しに

與謝野寛

あ

あが父は神代の巻を額に載せ午睡ひるねしましぬ袈裟かけながら

あが年は十あまり八つ斯かれども恋ちふことはつゆも知らなく

あが友の古泉千櫨は貧しけれさみだれの中をあゆみたりき

あが手にてぬぐへど母が落ちくぼむまなこに泪またわき出でし

あが母の吾を生ましけむうらわかきかなしき力おもはざらめや

吾が仏文槻あやつきの木の御厨子にまさせまつりて礼拜すべし

あが村の盆もさびしく終りにし肌さむきまで月冴えにけり

あが眼やさしく濡れてものいへば花は微かに動くとするも

吾が病いえなばうれし癒えて去なばいづべの方にあが人を待たむ

秋口のごとく冷えつつみちみちてきこゆる音の吾を疲らしむ

翌あつ日のさだめは知らず妻も吾も永遠のいのちを生くと思へ

朝あさに吾を見に來ます母とゐてながむる山は萌えそめにけり

與謝野 寛

與謝野 寛

齋藤 茂吉

松倉 米吉

齋藤 茂吉

佐佐木 信綱

堀口 庸吉

中村 憲吉

長塚 節

宮 柊二

後井 嘉一

金田 千鶴

朝霧のしみ立ちこめし野面のづらゆも天上るらしあが思ふ妹は

吾と吾が子と野なかの寺に銀杏の葉あみつゝひろふその銀杏の葉

吾と牛としばし眼と眼をみかはしぬ淋しきときに人のする眼を

吾に死ねとおもほし召せか西平ことむけ尙し征せやはとふ東あづまの国を

吾に執するそれよりほかに何ありや眼界ぎりぎりに生くべし今は

吾に照らふ今日の光は変らぬに悔やしきたより讀み終へにけり

吾に食めと箱より出し吾が姉が赤き林檎を一つくれたり

吾は征かむ清淨あかきところはさりながら根哭きて触るる橘の幹

あはれなる父ははとなりてすわり居るあが膝すらも疑ひにけり

天が下なべてたひらぎにいたる日を乞ひのむのみに吾も君も死なむ

雨すぎて庭のくさむら青々しあが家の灯の光りとどくかぎり

雨にぬるる広葉細葉のわか葉森あが言ふ聲のやさしくきこゆ

あ

堀内 卓

古泉 千櫨

前田 夕暮

宮 柊二

清水 千代

今井 邦子

宮 柊二

宮 柊二

島 木 赤彦

山 本 友一

土 橋 青村

斎藤 茂吉

あ

吾も少し驚きし地震の源が東京湾にありといひける

あゆみよりて吾を見上げたるまなざしのふかぶかとして愛しく思はゆ

吾を如何に思せか父は雪の日も木これ芋ほれ風呂たけと告る

青海にあが身浮かべて眼につづく銀のさざ波掻き分け行くも

青海を光る白帆をあやしみて日まねくも吾は岡にのぼりし

吾を置いてとばかりかかけて外にいでて星のわかれを歌ひます君

吾をおもふ一念ゆゑにたまきはる命を惜しといひし亡き母

吾をおもふ悲しき友のひとつにて嵐だつ夜に馬追來居り

吾を思ふたらちねの母世にますと心ほがらに独言したり

吾をなげく母をおもへば捨て難き望も遂に断つべくありけり

吾を待ちていしくも在りぬ火のあらぬ炉と冷え果てて鳴らぬ茶釜と

吾を待ちて寢入りしと思ふ孀の部屋に灯影明るくふけ沈みたり

斎藤 茂吉

小泉 蓼三

與謝野 寛

窪田 空穂

古泉 千櫨

與謝野 晶子

吉田 正俊

斎藤 茂吉

川中 悠行

西山 恭代

吉井 勇

加納 曉

吾を待つと江別の駅の腰かけにつつましく小さく母おはしけり

吾を前に年のほぎ酒汲む父のはやも酔ひませり面をゆるべて

吾を呼びて玉持の翁おぢと君は云へどまことは吾は玉ほこりの翁

癒えし子のはや今朝よりのいたづらの眼にあまれども妻も吾も言はず

戦後いくさごの心からくも河に出て眞裸まはだか体となりし吾をてらす月

いたつきの枕辺近く吾を呼びてねもごろ告げしことの偲おもばゆ

一本の蠟燃しつつ妻も吾も暗き泉を聴くごとくるる

岩手なる父のみそばに吾をはふりたもれといひて逝きし母はも

いやはての君が御枕とりかこみ友らはあゝし吾は会はなくに

いろいろの国語車房に聞きながら吾も東方に向ひつつあり

うしろより吾にさしかけし朱の傘に昼の淡雪ふりつもりけり

うつくしきこの曙の富士と吾と國土おなじう生れつる幸さいち

あ

加藤卓爾

古泉千櫓

伊藤左千夫

北岡伸夫

斎藤瀏

篠原志都兒

宮柊二

佐藤嘲花

宮柊二

斎藤茂吉

米田雄郎

九条武子